

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



クラウドナイン・クライマーズ・ネット (東京)

伊藤 忠男



僕は60歳になる節目にインド北部インナーライン上の山に登るつもりだった。許可申請をする前にその山を神と崇める山麓の人々に同意を求めに出掛けた。スピティ南部は洪水で道路が寸断されていたため北からサトレジ河へ向かう。クンザンラの手前で、82年に僕らが初登頂した僕かしいCR14峰(6079m)の麓を通った。中央左側のバットレスが僕らのとったラインだ。氷河が僕の頭髪みたいに後退してしまっただ。悲しい(どっちが?)



2011年12月4日有森裕子さんのNGOが主催するアンコールワット国際ハーフマラソン。給水所でボランティアするスムロン。この日はCAN(アンコール・クライマーズ・ネット)・YOUTHのメンバーも全員が給水ボランティアに借り出された

目指せ、 アンコールワットクライマー誕生!!

2005年の夏、スピティ(インド最北のチベット文化圏の地域)から帰ると親展の封書が来ていた。プータン政府が行政ネットインフラ構築技術者の派遣を1人、日本政府に要請していた。これはもうあつしのために用意された仕事でしょ、なんて僕はノータン気に応募していたんだ。でも封を開けると僕はその試験にあつさり落ちていた。電話でウルグアイと

かファイジーとかの代替案を提示されたけれど、僕はヒマラヤ文化圏にしか行く気は無かった。でも僕の奥さんはどこの国でもOKっていう条件で同様の試験を受けた。第三世界でひとの役に立ちたい、彼女の思いは僕より圧倒的に純粋だった。そして奥さんは受かり、派遣先はカンボジアだった。オレも行くの? 約束じゃん。は。約束死守は僕の信条。しかし。約東死守は僕の信条。しかし。あんのかなあ、とは思った。75年、泥沼のようなベトナム戦

争が終わった。僕はでんで単純に、これでアジアは平和になる、そう思った。エベレスト南壁が遂に陥ち、ボードマン、タスカールの「シャイニング・マウンテン」※に僕は夢中だった。だけど何も分かっていかなかった。その頃カンボジアは深い闇に飲み込まれていた。それまでの腐敗政権に代わって出現した指導者によって終わりの見えな

い内戦が始まっていた。緑と水の豊かな国土は地雷と不発弾にまみれた。スムロン、キムスロイは内戦中に生まれた希少な世代だ。2人の脳裏には機関銃の音と次々と倒れていく人々のイメージが、いまでも鮮明に残っていると言う。でも彼らは恐ろしい虐殺を経験していない、厳密には、そして幸いにも。

奥さんは2006年3月アンコールワットの街シエムリアプの州教育局へ赴任した。僕は中国人PG(プログラマー)チームを率いて月島(東京)のトリトンでシステム開発に従事していた。3月目標だった納期は遅れた。5月中旬、新品のギヤをザックに詰めて何の根拠も無いのに岩はあると決め込み、僕もシエムリアプに向かった。すぐに、UNTAAC(国連カンボジア暫定統治機構)がカンボジアに入った1993年に農村開発をテーマに活動を開始した国際NGO「るしな」のリーダー、松本清詞さんと会うことが出来た。そして僕は「るしな」のIT顧問になった。

※1975年、ピーター・ボードマンとジョー・タスカールの2人はチャンガパン西壁(インドヒマラヤ)に挑み、困難なルートを少人数で成功させた。「シャイニング・マウンテン」は、想像を絶する決死の場面が連続する彼らの手記。1982年エベレスト北東稜で行方不明。2人を記念して優れた山岳文学に与えられる「ボードマン・タスカール賞」ができ、邦訳『死のクレパス』(映画『運命を分けたザイル』)が受賞している。